平成14年度日本応用地質学会東北支部総会・シンポジウム

八千代エンジニヤリング（株）
小菅　芳男

同学会の総会およびシンポジウムが平成１４年５月３１日（金）15:00から青葉区の簡保ヘルスプラザ２Ｆ蔵王の間で開かれました。

総会では田野支部長（日大）の挨拶に始まり、平成１３年度の活動報告、会計報告、平成１４年度の活動計画、予算、役員人事等が審議され、無事可決成立しました。この中で平成１３年度の活動では、支部総会とそれに引き続いて行われたシンポジウムには東北地質調査業協会の協賛を得て行ったものです。

総会における田野支部長挨拶

シンポジウムは「日本の旧石器問題に応用地質学は何を貢献できるか」というタイトルで行われた。これは、平成１２年１１月に築館町の上高森遺跡で発覚した石器ねつ造問題に応用地質学の立場から何が出来るのだろうかとの疑問に答えるべく設定したテーマでした。公開シンポジウムであったことと一般の関心も高かったことから、シンポジウムには総会の倍以上の参加者（94名）が集まった。またテレビ・新聞各社も多数取材にあたった。

総会（会計報告）

また１０月３１日、１１月２日に郡山で実施した本部研究発表会も東北地質調査業協会の協賛を得て実施したもので、９０編の研究発表、東北大学の浜口博之教授による「磐梯山の最近の火山活動と噴火予知の現状」と題した特別講演があった。

引き続く１１月２日（金）応用地質学会東北支部主催の見学会が行われた。場所は磐梯山・猪苗代湖周辺であり、宇都宮大学の中村洋一教授が案内人を努めた。

総会の大きな議題の１つは日本応用地質学会の法人化に伴う支部会則の改定であり、各支部とも共通の支部会則となる。なお、日本応用地質学会の法人化はこの秋頃と想定されている。

引き続き日本応用地質学会会長の大島洋志氏による特別講演が行われた。タイトルは「私と応用地質（広い視野、若々しい気持ちで）」であった。氏は国鉄、鉄道総合技術研究所の経歴が長く、多くの鉄道トンネルの建設に携わっている。

特別講演中の大島洋志氏（日本応用地質学会会長）

講演では数々の失敗例から地質技術者としてあるべき姿が示された。その要旨は以下のようにまとめられる。（会長メモより）

①広く異分野の人と交流し、その交流を大切にしつつ、見聞をひろめること。
②建設における問題や維持管理における問題を実感できる経験を踏むことの大切さ。
③失敗に学ぶ、先達の知恵や苦労に学ぶ、多くの事例に接することの大切さ。
⇒『不本意な妥協で技術屋の良心を失うな』
⇒渡邉貫氏の『地質工学』は含蓄深い名著と最近痛感している。
④地質技術者は路線選定の段階で最大の努力をすべきこと。
⇒『地質工学』の緒言は今でも十分に通じる。
⑤信頼される、頼りにされる地質技術者を目指して自己啓発すべきこと（実学指向）。
⇒土木工学と地質学の橋渡し（翻訳者）の役割を果たす必要。
⑥リスクマネジメント的発想をベースにして思考できる地質技術者であること。

なお、日本応用地質学会東北支部の平成１４年度の行事予定は以下の通りです。

平成１４年
　９月２０日(金)：見学会
　　（長井ダムを予定）
　１１月１５日(金)：ミニシンポジウム
　　（東北の地質工学）
平成１５年
　１月２４日(金)：研究発表会